《翻刻》細川幽齊『詠歌大概抄』（永青文庫所蔵）《四》承前

――「秀歌大略抄」（全）――

林　達　也

【始めに】

本稿は、永青文庫所蔵、細川幽齊『秀歌大略抄』の翻刻全部である。祖本は『北岡文庫蔵書解説目録』六十一ページ以下にあるように（『駒澤国文』五十号八十四ページ～八十六ページ参照）『駒澤国文』五十・五十一・五十二で翻刻してきた『詠歌大概抄』と同じ桐箱に収まるもので藤原定家『詠歌大概』が『秀歌之体大略』を含みこんでおり、『秀歌大略抄』も『詠歌大概抄』に接続するものとしてここに翻刻する次第である。祖本はこれも『北岡文庫蔵書目録』にあるとおり、表紙題簽は『秀歌大略抄』とするが、内題は「秀歌之体大略」とする。本稿では、外題を採用した。

【翻刻本文】

秀歌之体大略

壬生忠峯泉大将定国随身杢允忠衡

子云々古伝云、延喜比ノ人

只云時みぶとにごるナリ

拾遺

春立といふばかりにやみよしの丶山も霞て今朝は見ゆらん

平貞文ガ家ノ歌合ノ歌也。貞文ハ好風ガ子也。桓武後

胤也。姓名ノ時ハフントスム也。作者ノ忠峯ハ昇進ヲモスベ

キ者ノ衛門府生ニテハテタル者也。

此歌忠峯ノ家ノ集ニモ巻頭也。勿論拾遺集ノ巻頭ニ

被置タル歌也。又公任卿ノ和歌ノ九品ヲ被立時ハ上品ノ

歌トス。又道済拾遺ノ作者也。光孝ノ末ノ源氏也十体ヲ被立タル時も此歌

ヲ最上トセリ。後鳥羽院御時定家家隆ヘ古今

集ノ歌イヅレ第一たるべきぞと御尋有し時モ此作

者有明のつれなく見えし別よりとある歌を両卿共に勅答被申し

ト也。作者ノ名誉也。如此ノ所ヲ以テ定家モ此秀

歌ノ体ノ第一ノ歌ニ入給ふ也。此已下種々ノ風体有ト
いへども尤可為歌規範者也。トリハキ吉野山ヲとり
出る所ハ春ヲ用ノ義也。花などの在所なれば也。又吉
野ハ古郷ニテ捨ラレタル所ノ春ノくるをも知ぬ在所
ながら春ノ光ノあまねく広大なるをいふ也。然バ古郷
に我身ヲ比して、下ノ心ハ昇進なども含ベシ、只、昨日ノ
けしきにかハりて此山のあしたに霞たるを感じて
読ル成べし。山も霞テ今朝ハみゆらんと在所に眼ヲ付
べき歌也。尭考法師ニある人此歌ヲ尋しにいひ
もて行ハ面白心ハ何ともいはれぬ境なりと被申し、
と也。言語道断の所なるべし。

定家

心あての思ひの色ぞたつた山今朝しもそめし木々のもみぢバ

同

春の色とたのむまでやハ詠つるいふばかりなる山の霞を
奥ハ光台院五十首ノ時初春題也。両首共ニ右ノ
ヲとり用ラレタリ

三体詩

節去(リ)蜂愁(テ)蝶不(レ)知暁庭還(カヘテ)繞(ル)二折残枝一(ヲ)自(ラ)縁(ル)二今日人心(ノ)
別(ナルニ)レ未(ダ)二必(シモ)秋香(ハ)一夜(ニ)衰一

右鄭谷ガ十日菊ノ詩也。

光孝天皇　仁明天皇　文徳号田邑帝
光孝号小松帝五十七崩

古今百人一首二入

君がため春のゝにいでゝ若なつむ我衣手に雪ハふりつゝ

仁和御門みこにおましくける時人に若な給ひける

御歌　古今集ノ詞書也。

仁和御門トハ光孝ノ御事也。若菜ヲ給ふハ賀ヲ給義也。誰ニトモなし

此御門五十三ニシテ御位ニつき給也。文徳ノみこハれき〳〵御座有しに清和ノ御治世すくなくて文徳ノ御弟ニテ継給ふハ徳のふかき故也。歌ハ有心体也。又無心体ト云事もあり。業平ノ情あまりてことばたらずといふにハかハりたり。是ハ臣下ニ若菜

三オ

ヲ給時ノ御製也。春ノゆふ〳〵としたる折にもあらず、夜寒ノ時分ノ雪ヲ打払〳〵若なをつむ心也。雪をば艱難ノかたにとる也。親王ニテましませバ如此辛労有テ人ヲ思召ノ義也。君がためと云より上一人下万民ニいたりたる御歌也。然バ天下ヲ思召事あらはれたり。是によりて天道ニ叶給テ御位にもつき給ふ也。定家卿はかりそめにも紅葉ばかりにては無本意とて如此心ノ有歌ヲ取出テあめり。新勅撰などの心同じかるべし。

よみ人しらず

新古
梅がえになきてうつろふ鶯のはね白妙に淡雪ぞ降
万葉

よミ人しらずと書事ハ当代御門御製或ハ位アル人ノ歌を下臈ノ歌必尊人ならねど作者奔走ノ人、勅勘ノ人ノ歌又ハ仏神ノ慥ならぬ歌又真実作者ヲしらざるハ勿論也。是ハ万葉ノ歌也。羽白妙にあは雪ぞふるハをはうづもるゝやうに

ハみるべからず梅花にうつりきてなく鶯のつばさに
淡雪ノちりかゝりたるさま也。冬ノ空にとぢられて
居たるがはや春に成テ友ヲしたひなどして鳴たれ
ば羽に雪ノふりかゝりて余寒をしりたる体也。たと
へバそこつにふと鳴出テ余寒の雪におどろきたる
心也。世間ニも此如事あり。能可思之。
毛詩ニ　出(デ)自幽谷還(ル)于喬木(ニ)
鶯ノ詩也。鳴テうつろふとある所に引給ふ也。

人丸　天智ヨリ天武大宝ノ比迄ノ人也。
或説ニ家門ニ柿樹依在之則氏とせり。

古
梅の花それとも見えず久方のあまぎる雪のなべてふれゝば
拾遺
古今ニハ冬ノ部ニ入たり。拾遺ニハ春也。是もうすくと
ふりたる雪也。ふりつもりたると見てハ無曲。それとも見え
ずといふに二ノ義アリ、雪中ニハ諸木ともにうもれ
ていづれを梅ともわかぬ心有。又、梅一の事にいひて雪
のふりたるも同ジ花の色なれバそれともわかぬと

いふ両義也。されども前之義理面白きと古今ノ
説にあれバ尤其分たるべし。鶯のつばさにあは
雪ノうすくとちりかゝりたるやうの言語道断の
心也。天ぎるハ空に如霞(霧カマヽ)ゆきノ散乱たる体也
打なびき春さへくればしかすがに天雲霧あひ雪ハ降つゝ
万葉ニハ天霧ト書也。しかすがハさすがに也。目もきりて
などいふも目ノちりくとしたる事也。又、歌に親句疎
句といふ事あり。此歌ハ疎句ノ歌也。詞ノつゞきと
縁ハなくてよくつゞきたるに余情あるもの也。此歌ハ
久方のあまぎるといふ所ばかり親句也。能々可吟味也。

貫之　系図不詳

古今　百

人ハいさ心もしらず古郷ハ花ぞ昔の香ににほひける

貫之家ノ集ニハ昔初瀬ニモあり、古今ニハ貫之な
をして詞書ニす。　はつせにまうづるごとにやどり
ける家に久しくやどらで程へて後いたれりけれバ
かの家ノあるじかくさだかになんやどりハあるといひ

出して侍ければそこにたてりける梅の花ヲ折りテよ
めるとあり。貫之宿坊に中絶シテ来りたるをある
じ恨テ此やどりハかハらぬといひしを貫之能
古郷を思ひ入テ人ハともかくもあれ、梅のにほひを
頼むといへり。花ぞ昔ノとあたりていへり。雖然人ハ
いさといひて古郷を思ふ心あり。余情かぎりなき
歌也。いさハ近代不知といふ事に連歌などに
用。いさハかならずしらずとうくる詞也。連歌にも中
ニハ有べし。下にをく事ハいかゞと宗長などいひしと
也。宗祇注ニハ人ノ心ハしらず花は昔ノ香ニ匂ひ
けるとうたがハしさの下句なりとあり。能可思慮也。

同

古今

桜花咲にけらしも足引の山のかひより見ゆるしら雲

晴ノ歌幽玄体也。古今の詞書に歌たてまつれと
仰られし時によミてたてまつれるとあり。五十首
百首ノ歌ヲ読てまいらせよとあるにハ替りテ歌ノ

五オ

手本ニよミて進ぜよとある心也。歌ノ心ハかくれたる
所なし。いかにもしたてさハやかに幽玄体ノ歌なり。
けらしものもノ字面白きと俊成ノほめられたると
也。顕昭などハ種々ノ義ヲ付たり。当流ニハ只うち
むかひて見る也。山のかひ狭此字也。狭
巴狭巫(ハカウブ)狭明月狭ノ三狭ト云ハ山アリテ其間に
水ノある所をかうと云也。かひとといふも山のあハひ也。
只見やりて読る歌也。
為家此歌ヲとりて
明わたる外山の桜よのほどに花さきぬらしかゝる白雲
心ハ同ジかるべし。

山辺赤人　先祖不知者也。祇注ノ本ニ
天武ノ御子弓削法皇ト云々
鴨長明方丈記ニ田上ニ其趾在之云々
又下野国薬師ト云所ニ流シト也。

新古
百敷の大宮人ハいとまあれやさくらかざしてけふもくらしつ

五ウ

内裏ノ事をいはんとていへる五文字也。
正月二日に節会公事有テ朝家ノ奉公暇ナキ也。
又、四月ハ諸社ノ神事等にひまなし。

正月ノ公事

元日　四方拝　小朝拝　又ハ朝賀
其外之節会　射礼賭弓（ノリ）　叙位
二宮大饗（ニグウダイキヤウ）　臨時客（キヤク）　内宴（ナイエン）　政始（マツリゴトハジメ）
吉事奏（ノソウ）　除目（チモク）三ケ夜　女叙位（ニョジョイ）

二月

釈奠（シヤクテン）　春日祭　率川（イザヤ）祭　大原野祭
祈年（キネン）祭　列見　祈年穀（キネンコク）奉幣（ホウベイ）　臨時ノ仁王会
位禄定（イロクノサダメ）　季ノ御読経（ドッ）

四月

告朔（コクサク）　齋院ノ御契（ゴケイ）　孟夏旬（マウカノシユン）　或平座（ハヒラザ）
貢氷（コウヒヨウ）　太神祭　稲荷祭　山科　平野
松尾　杜本　梅宮　広瀬　竜田等之祭
擬階奏（ギカイ）　灌仏（クワンブツ）　伊勢神衣（カンミソノ）祭　日吉

賀茂国祭　関白賀茂詣　賀茂　中山

吉田　駒牽　四月ニモアル事也。新日吉ノ三枝（サイグサ）

時ハいつぞなれバ三月桜さきて世間もゆう〳〵

として天下も泰平なれバ暇も有毎日花ヲ

見テくらすの心也。けふもくらしつといふに今

日もけふもと数日をこめたり。万葉人丸歌に

百敷の大宮人まかりいでゝあそぶこよひの月のさやけさ

百敷ハ百官ノ座ヲ敷によりて云也。

源俊頼朝臣　経信卿子母貞高女　従四位上前木工之頭

金葉

山桜咲そめしより久かたの雲井に見ゆる滝の白糸

源太政大臣の歌合とあり。祇注ニハ満山花なる

折節見ればさながら雲井よりたきのおつるや

うにみゆる也。もとより滝なれども花ゆへ興を

ます心とあり。御説ニハ花をまつ心の切なるにより

朝夕山ヲながめなれていかにもかすかなる滝を

見出して置テ近日滝より上に又滝の落るは

六ウ

七オ

山桜ノさきそめたるよと見たてたる歌也。花に執心の故成るべし。

後鳥羽院　高倉院　安徳天皇　後鳥羽院　土御門院　順徳院

新古

桜さく遠山鳥のしだり尾のなが〳〵し日もあかぬ色哉

尺阿九十賀ヲ給ハりける時うしろの屏風の御歌也。人丸あし引の山鳥の尾のしだり尾の歌ヲ取給ふ也。心ハ花のさく比の遠景ヲ興ジテ春の永日にもあかじと也。又ハ俊成卿御師範にまいられたる間長久ヲ祝し給ふ御心なるべし。自讃の御歌とぞ、其比時代不同ノ歌合ニも具平親王ノ

命あらバ又もあひミん春なれど忍びがたくてくらすけふ哉

とある歌につがひ給ひしと也。手もつけがたき御歌也。

西行法師　従魚名左大臣十三代秀郷

ヨリ九代孫父ハ康清俗名
義清鳥羽院下北面法名円位改
西行

新古

をしなべて花のさかりに成にけり山のはごとにかゝるしら雲

色々に了簡シテ読るもあるに引かへてやすらかにつく

ろハずしてよめる事是西行の歌様也。本歌ハ貫之

が桜花咲にけらしもをとりて花のさかりに成にけり

とこゝにておどし(マヽ)つけてよめる也。如此けりといふ事を

西行え物にて読れたると也。

ふりつみしたかねのミ雪とけにけり

心なき身にもあハれハしられけり

素性法師　良峯宗貞素性注良因固執

或説清和殿上人俗名左近将監玄利(ハルトシ)

古今

いざけふハ春の山べにまじり南暮なばなけの花の陰かハ

うりん院のみこのもとに花見に北山のほとりに

まかれりける時よめるとあり。
此五文字ハ友などをさそふ心也。又我心をもさそふ心
成べし春の山べにまじりなんハ家ぢにとをき
山ふみをせんと云也。所ハ雲林院なり。ミこのもと
をほめてしらぬ山ぢにてもなし暮ぬともやがて
此所の下ぶしをせんと也。なけハ他流にハなげと
にごる。当流にハすむ也。なけハ暮たりともなかる
べきかといふ義也。野遊ノ体也
思ふどちそこともしらず行暮ぬ花の宿かせのべの鶯
よミ人しらず

拾遺
桜がり雨ハ降きぬ同じくハぬるとも花のかげにかくれん
是ハ後鳥羽院ノ御抄にさま〳〵の説あれども只
物をもとむるをバかるといふ也。愚老(定家ママ)の心ハこゝかしこの
花をミたる体ばかりなり。

俊成 又やミんかたのゝミのゝ桜がり花の雪ちる春の明けぼの
和泉式部 咲ぬらん桜がりとてきつれどもこゝにハもとのあるじだになし

八ウ

道命 折りしもあれ花の盛にいでたゝ（マヽ）ば桜がりとや人の思ハん

実方 此御幸桜がりとや思ふらんあなうれしげの花の景色や

定家卿 桜がり霞の下にけふ暮ぬ一夜宿かせ春の山もり

又かりの心によめるもあり。実方ハ色々の心有ども

只さくらをもとめありく体也といはれたり。歌のさま

面白くやさしき体也。ぬるともハぬるゝとも也。とても

桜に心をうつして来りたれバぬるゝとも此花の

かげにかくれんといふ義也。

小野小町　出羽郡司小野良実女

一説当澄（マヽ）女仁明ノ御時

承和ノ比人云々未詳

古今

花の色はうつりにけりないたづらに我身世にふるながめせしまに

小町古今ニテ第一ノ歌也。彼集の数ニ入タル歌也。此歌

ニハ表裏ノ説あり。おもてハ花の咲たらバ花に身ヲ

なさんと思ひしに世をすめばことしげくてとやか

かくやとうちまぎれてすぐしたる也。見ぬ花なれ

九オ

ばうつりにけりなと察シテ云也。裏の説ハ身のおとろへも我とはしらぬ物也。花のおとろへを見て我身もかくうつりてこそあらめと思ひやる義也。ながめせしまにハ詠也。為氏のながめをナガ雨ト雨をそえてふかく見よと申されしと也。花時風雨多ト云心也。

此歌にに文字四あり。耳にたゝず上手のしわざ妙所也。宗尊親王三百首に

白雲の趾なき峯に出にけり月のみふねも風をたよりに

為家卿詞に云、にの字あまたさし合か、小町が花の色ハうつ りに—是ハ秀逸ニ候へば何事か如此あり。

九ウ

【以下九ウ頭書】

古今序ニ小野小町ハ古ノソトヲリ姫ノ流也。アハレナルヤウニテツヨカラズイハゞヨキ女ノナヤメル所アルニ似タリツヨカラヌハ女ノ歌ナレバナルベシ。此序ニ六人ヲサシテアゲタル中ニハ誰ナキ也。ツヨカラヌハ女ノ歌ニテハ花ノ事也。ナツカシキ所スゴキ所モ有、サレドモ少トゞカザルハヨキ女ノ煩ヤウナルト云義也。

【以上九ウ頭書】

俊成卿　御子左家長家　大納言忠家　中納言俊忠

俊成本名顕広

法名尺阿　定家

定長法名寂蓮

新古

又やミんかたの丶ミの丶桜がり花の雪ちる春のあけぼの

桜がりハ大方の所なりとも面白かるべきにかたの丶花のちる折節の景気ヲ興ジテ又やミんといへり。かたのとうけたるハ又ミん事ハかたきといへる秀句也。

御野といふもかたの丶事也。家隆の又やミん又やミざらん白露のたまをきしきる秋萩の花とよまれしを京極黄門ノあはれ太夫入道の又やミんかたの丶ミの丶桜がりにハおとりたる物かな又やミんにて又や見ざらんハ不足なき物をと云々

宗祇又やミん花に朝露夕霞首尾面白と也。

詞花に

長能霰ふるかたの丶ミの丶かり衣ぬれぬ宿かす人しなけれバ

とあり。今ノ景ハ四あり。曙と花と雪、交野也。

少も心にそまぬ事のなきを興ジテ読る也。

十オ

紀友則　梶長　名虎　有常　友則

女子

光孝天皇十七孫　船守　梶長

興風　本道　望行　貫之

有友　友則

古今　百

久堅の光のどけき春の日にしづ心なく花のちるらん

雨風ニさそはれて花のちるハ無余儀是ハ日影の
ゆふ〳〵と有に花のちるハ何としたる事ぞと也。一
年十二ヶ月ノ中ニも三月ハ永日ニテ長閑なる
折節さく花のいそがハしげに散ぞと花にふかく
恨をいひかけたる心也。何とてと云字ヲそへてミるが
口伝也。為世に此心ハ人ノ心ハ(マヽ)花の心かと人の尋
しにいづれにても可然と答られしと也。されども
花の心とミるがまさり侍り。裏の説ハ長閑なるに
ちるべき道理ハなけれども時節到来すれば
散物ニテあるぞとをしへて読る也。日ノ光ノのど

十ウ

かなれバ春風散やうに思ひたる歌也。可秘しと。云々

後京極摂政太上大臣

御堂関白五世忠通　九条月輪摂政兼実　後京極良経

法性寺関白

新古

あすよりハ志賀の花ぞのまれにだに誰かハとハむ春の古郷

是ハ三月尽の歌也。故郷ヲ云出したるハ花の時分春

さへとふ人まれなるに春くれてあすよりハ誰かハ

とハんと思ひやりたる心也。まれにだにのてに〇(はか)(ママ)をば能

可吟味ト也春の古郷春殿ノ古郷になしてミるなり

と祇注ニアリ。

持統天皇　天智天皇中ノ御子女王也。

天武天皇ノ后也。

新古　百

春過て夏きにけらし白妙の衣ほすてふあまのかく山

此御門女帝ニテおハします也。万葉ニハ衣さらせり

又衣ほす也トあり春過て夏きにけらし勿論の

十一オ

事ニテよろしからざる由云説あれども此歌更衣ノ歌也。これによりて新古今夏ノ部ノ巻頭ニ入たり。天ノかぐ山春ノ間ハ霞ふかくおほひてそれとも見えざりしが春過ぬれば霞も立散して首夏の天に此山あきらかに見ゆるを白妙の衣ほすとハいへり。ほすハ衣ノ縁也。夏きて霞の衣ヲぬぎて山の明白なるを白妙の衣ほすとよミ給へり。されば春過ても夏きにけらしもミな用ニ立テ余情アル御歌也。

大井川かハらぬ井せきをのれさへ夏きにけりと衣ほす也

此歌ハ井せきニかゝる波ヲ衣トいへり此等ノ歌ニテモ心ヲ得ベシかく山のくの字清テよむべし

相模　入道一品宮女房父不詳母能登守慶滋保幸女為公資妻仍相模本名乙侍従

後拾遺

見わたせバ波のしがらミかけてけりうの花さける玉川の里

是ハ玉川の里といふに付て見渡ばとをける五文字也。
川辺の里に卯の花のさきてへう〳〵としたる体也。
大方の垣ほなどハながれも行べきさま也。浪のしがらみハ
悉皆卯花なりといへり。したてさハやかにして晴ノ歌ノ体也。
正子内親王（後朱雀院女王母堀川右大臣女）ノ絵合し侍けるかねのさうしにかき侍ける
同時此番ノ歌
卯花のさけるさかりハ白浪の立田河原の井せきとぞミる（伊勢大補）
俊成卿

千載

五月雨ハたくもの煙打しめりしほたれまさるすまの浦人
藻などかきあつめてたくハ五月雨ヲ避ためなれども
打しめりてもえかぬるを焼侘びてすまのうら人いとゞ
しほたれまさりたるあはれをいひのぶる歌也。祇注ニ
五月雨ハといふハ五月雨ノ比はといへる心也とあり。また
さみだれハ日数ふれどもわたなべの大江のきしハひ
たらざりけり此五月雨ハとをけるハノ字常ノ事也。
西行法師

十二オ

新古

道のべの清水ながるゝ柳かげしばしとてこそ立どまりつれ

清水ながれてすゞしげなる柳陰なれバそとの間

と思ひて立どまりしに暑気を忘テ時刻ヲ

うつしたる様也。わざともとめぬ納涼ノ地也。極暑ノ

時分在所ハ柳かげ清水ながるゝ体ヲ思ふべし。つれと

云字に眼ヲ付べし。しバしと思ひつる物を日をくらし

けるよといへり。但祇注に尭孝法印ノ自筆ノ本ニ

けれと有。けれにても心おなじ。我ハけれハまさるべ

きかとあり如何

退(マカツテ)レ朝(ヨリ)散(ズ)二花底一(ニ)皈院迷二(フ)柳辺一(ニ)ト云杜子美詩ノ心も相似タル歟

清輔朝臣　魚名七世孫頼任　隆経　顕季　隆経

顕季　顕輔　清輔

顕昭

新古

をのづから涼しくもあるか夏衣日も夕暮の雨の名残に

あるかハ哉也。五文字ふとハ心得がたし。夕かげになれバすゞ

しき物なるに雨の名残サへあひくハゝりてれん〳〵すゞしくなる体也。然バをのづからといふ所よくあたれり。夏衣日もとつゞきたるハ衣にひもといふものあれバつゞけ侍る也。

青苔ノ地上ニ消シレ残雨ヲ緑樹ノ陰ノ前ニ逐ニ晩涼一

俊成卿

千載

いつとても惜くやハあらぬ年月をミそぎに捨る夏の暮哉

一刻千金などいひて光陰ノ過るヲバ四時ともにしたふ物なるを何トテ御祓ニハながしすてなどするぞと也。只此極暑をば少ながし捨たき心も有べし祇注ニハ猶年月ヲ捨るといへり。尤作者ノ物成べしと有。

安貴王

拾遺

秋たちていくかもあらねどこのねぬる朝けの風ハ袂涼しも

このねぬるとハねぬるといふ義也。歌ノ心ハ秋ノ立テ程もへずしてはや朝けの風のたもとに涼しきとお

どろきていへる也。時節を能ことハりたる歌也。このね
ぬる朝けハかならず習日ノ事をいふべし。惣別朝げ
夕げといふハ食物ノ事ヲ云也。右ノ歌ハ只朝けと云也。
土御門院朝明の霞の衣ほしそめて春立なるゝ天のかぐ山
朝明はじめて新勅撰ニ入たる也。

恵慶法師　先祖不見寛和比人云々

拾遺　百

八重むぐらしげれる宿のさびしきに人こそみえね秋ハきにけり
詞書ニ河原院にあれたる宿に秋のくるといふ心を人々
読けるにとあり歌の心ハあらハ也。人こそみえねとハお
とゞのさかへ給し時世の人きこえたる事もミな夢ノ
やうにて昔忘ぬ秋のみ問来事をあはれむ歌
也。河原院ノ昔ヲ能々思ひつゞけて此歌をバ見侍
べきとぞ
門前零落鞍馬稀所ノ有様如此
貫之とふ人もなき宿なれどくる春ハ八重葎にもさハらざりけり
昔ハかやうにも侍るにや今ハ等類に成侍べし

十三ウ

寂然法師

千載

秋ハきぬ年も半ばに過ぬとや荻吹風のおどろかすらん

秋くれば年ノ半ばに過ぬるヲ荻ノ葉ノそよくと

つげわたるにおどろきて程なの光陰やと身ノ向後

ヲ観ジタル体也。　東坡ガ秋懐ノ詩ニ

苦熱念二西風一常恐来　無レ時及茲遂凄凜　又作二徂年悲一

西行法師

新古

あはれいかに草葉の露のこぼるらん秋風立ぬ宮ぎのゝ原

心ハ明也。宮城野ハ露もしげく風景もしげき所なれば都にかへりて我宿のあれたる庭などに対して秋風を聞テ此比の宮ぎのゝ体ヲ思ひやりて読る歌也。西行ミし所なれば時節ノ景気ヲ感ジタル也。庭に荒風ヲふせぎかねたる心も有べし。作者ノきどくなる歌也。

大江千里阿保親王　大江音人　千古

十四オ

古今　百

月ミれば千々に物こそかなしけれ我身ひとつの秋にハあらねど

日ハ陽ノ気なればむかふに心の和する也。月ハ陰ノ気ナル

によつて打詠に心もすミあはれもすむ也。されば

千々に物こそかなしけれといへり。千々にといふハ数も

かぎりもなくかなしきと云義也。且（サセントナヾハカリ也）千　文選ノ

かたち読也。此千々と同心也。下句ハ秋ハ天下万民ノ

愁ニテ侍るに我一身ノ様におぼゆる心ヲいはんとて

我身ひとつのあきにハあらねどゝいへり

（長明）詠ば千々に物思ふ月に又我身ひとつの嶺の松風

（業平）大かたハ月をもめでじこれぞこのつもれば人の老となる物

燕子楼中霜月夜秋来只為一人長

摂政太上大臣　後京極

新古

古郷のもとあらの小萩咲しよりよな〳〵庭の月ぞうつろふ

是ハ月前草花といへる題也。もとあらの小萩とハ少

もとのあらく古枝などよりまばらに生出たるを云
也。古郷物かなしきに萩のさき出たるを待えて
おもしろきと思へば萩もやう〳〵うつろひ月も有明
がたに成て又もとのかなしき古郷になる心をふくミ
て読り。よな〳〵庭の月ぞうつろふといへるにて花
もうつろひ月も有明がたになり秋も末にうつり行
体也。祇注に尭孝ノ筆跡ニハ古郷ハと書り。猶歌ノ
心ニ叶べきとあり。

源俊頼朝臣

千載

あすもこん野ぢの玉川萩こえて色なる波に月やどりけり

玉川江州ノ名所也。萩ヲ読る所也。萩ノ下枝に月も
うつろひ波もこゆるばかりに色のうかべるをかく読り。萩
こえてハ波の事也。かならずしも萩をこえ侍ずとも
玉川の所がらなればかくいへり。言語道断の興に乗
じてあすもこんと云へり。宗長云昔ある抄ニあす
もこんとなぐさめてかへらんと思へどもえかえりやら

ぬ体也。

家隆　良門孫　中納言兼輔　刑部卿惟正　太皇太后宮為頼
讃岐守伊祐　因幡守頼成　左衛門佐清綱　紫式部女子
因幡守隆時　猫間中納言清隆　権中納言光隆号壬生
家隆　隆祐

新古

ながめつゝ思ふもさびし久方の月の都の明けがたの空

ながめつゝといへるに程へたる心あり。つく〳〵とながめてこゝにても宮殿楼閣ノ朝ハさびしくミゆる物也。其心をもつて終夜の月をミるもさびしさまされば月宮殿までも思ひやりたる体也。

後鳥羽院

新古

秋の露や袂にいたくむすぶらん長よあかずやどる月哉

秋の夜の月を御覧ずるに感思になやまさるゝ心よりおぼえず物かなしくなり御涙の露御衣ノ袖にむすぶまゝに月のやどれるさま也。長夜あかずハ

十五ウ

十六オ

終夜の事也。袂にいたくハつよくといふ心也。いたむ
心也。つよくあたればいたき物也。
新古きり〳〵すいたくな鳴きそ秋の夜のながき思ひハ我ぞまされる
とよめるもつらき心也。万民をおぼしめす故に一ツ
ふたつの御思ひにもあらで如此御涙の隙もなしと也。
無限秀歌とぞ

よミ人しらず

古今
鳴渡る鴈の涙や落つらむ物思ふやどのはぎの上露
能きこえたる歌也。物思ふやどの萩の露を見て
誰庭に見たりともさびしからんと也大かたもかな
しき比なるに萩の上の露を打詠テゐたる折
ふし鴈の鳴テ行ヲ聞テ此萩の露のかなしき
さまとのつねの露にあらずかりの涙の落そひ
たるかといへり。感情ふかき歌也。鳴といふに付テ涙ノ
さたハ侍る也。是歌ノ余情也。

同

古今

萩が花ちるらん小野の露霜にぬきてをきませ（マヽ）さ夜更とも

顕昭が露霜と秋ノ露ヲ云トいへり。露むすびて霜となるといふ事ありなど、いふ定家卿ハ他門にハ露霜と書テつゆ露と申が庭訓ニハ露霜ト両種ヲ云つゞけたると存むすばぬ程ハ露むすべば霜となる格別かと被書置たり。小野ハ名所にあらずぬれてをノヲノ字ハやすめ字也。猿丸歌也。家ノ集に女のもとへゆくとてとあり。それをふくミて見侍るべきならバ露霜にぬれて行くこそ我心ざしのミゆべけれとド露のかぎり霜のかぎりなる夜ハ更とも今行べきとよめる歌なるべし。

ゆけ〳〵どあはぬいもゆへ久かたのあま・霜（露）にぬれわたるかも

三十九代天智天皇ノ御製　舒明（ショメイ）天皇

天智

天武　持統

後撰　百

十七オ

秋の田のかりほの庵とまをあらミ我衣手ハ露にぬれつゝ

祇注ニ刈穂ノ庵例ノ重詞也。さて歌の心ハ秋ノ田ノ庵其時過テ秋も末になり行笘などもくちはてゝ露をふせぐ事もなきまゝ露のたぶ〳〵とをきあまりたるごとく我袖のぬるゝ由なり。其故ハ王道ノ御述懐ノ御歌也。此君九州におハします。時世ヲおそれ給ひて苅萱ノ関ヲスへ往来ノ人ヲ名のらせて通し給ふ事あり。天子の御身ニテ御用心ある事ハ王道もはや時過るにやとおぼしめす御心也。時過たるかりほの庵にて覚悟すべきとぞ猶尋べし。此歌ハ上代ノ風也。上古ハ心だに能思ひ入れバ詞ハ巨細になきもおほかるべし。能々余情ヲ思ふべき事とぞかりほ穂と云説あれども只かりをとよむべし。猶是を尋べしといふ事ハ此御門は事外労ヲ御沙汰有し性也。其故に民ノ上ヲ一段つよく思召かなしみたる也。時過たるかり庵まで田ヲ守民の心ヲつくすを御らんじて不便ノ態

十七ウ

かなと天子ノ御袖に涙ヲかけられたるを我衣手
ハ露にぬれつゝとあそばしたる也。天子の御歌ニテ
尤感ふかき也。
万葉 秋田かるかりほゝ(マヽ)つくり我(マヽ)おれば衣手さむし露置てけり
かりほかりなる庵也。万葉に借庵と書り。御説
にハ天智天皇九州ニ御座有し事日本紀其外
王代記等ニ不見不審此御製ノ奥義ハ諒闇ノ
御歌也。平民ノ物も倚廬とて父ノ喪ノ時つゝしミ

【以下十八オ頭書】

賦笘枕壌忌文ノ詞也。父御門ノ時ハ諒闇也。国母ノ時ニハ御イミバカリニ
テ諒闇ハナキ也。

【以上十八オ頭書】

為所也。天子ハ諒闇ノ時父御門御かなしびに付テ
かり庵ヲ作かたはいにして板敷もなくあしすだれ
をかけどまにふし土くれを枕にすといふ也。以日易
月十二日倚廬に御座なり。十二ヶ月
御座有べき事なれども十二日につゞめ給ふそれを日

十八オ

ヲ以テ月ニかふと云也。如此シテ秋ノ田ノ庵ノごとくやつれ給ふかなしミあるにより田家をおぼしめしやりてよミ給へる御製也。孝行ノ道ヲ上下万民本とするゆへに此歌を定家卿百人一首ノ巻頭に被置しと也。諒闇と云事ハ斉明天皇よりはじまりたる也。此所をバ宗祇秘して云残シタルカ猶尋べしと有間奥旨ハ残したる所見えたり。

文屋朝康　古伝云三河蒸
康秀男延喜比人但先祖不詳云々

後撰　百

白露に風の吹しく秋の丶ハつらぬきとめぬ玉ぞ散ける

吹しくハしきりにふくあらき風也。此の歌ハ別に心なし当流ノ風ノ吹きタル景気也。つらぬきとめぬ玉とハ玉をば糸にてつらぬく事あり。それをぬきミだしたると云ヘル心也。惣ノ心ハ秋ノ野ノ所せきまで置ミちたる露のおもるばかりなる草木ノ露はら〳〵と散乱たる体をかく読り。能々其

景気ヲ心にふくミて見侍べき歌也。

藤原清輔朝臣

千載

立田姫かざしの玉のをゝよハミ乱れにけりとミゆる白露

春ハさほ姫秋ハ立田姫其時々をつかさどり花を
さかせもみぢをぞそむる神也。此歌ハ露ノ置乱たる
を感ジテいへり。姫といふにつきてかざしの玉とハ
いふ也。立田姫もミぢなどそむる時分にて心いそ
がハしくかざしなどもとりわきおさめぬかざしの
玉かと露をいひなしたり。露ひとつのことをか
やうに云たてたる尤作者ノ物成べし。

西行法師

新古

白雲をつばさにかけて行鳫の門田の面の友したふなる

是も景気ノ歌也。冷しき秋ノ空に白雲ノ風に
ふかれて行折ふし雲井のかりのはるかに飛行
も門田ノ友をしたひて鳴落やうなるとよめり

下ノ心ハ白雲殿上する人にたとへたる也。鳫ハ田面ノ友をもしたふ也。人間ハ世にをくれぬれバミしやうにもせずして旧友などをもしたハぬ物也。歌にハ心ノある体也。祇注ニハ只友ヲしたひて落るとばかりあり。

よミ人しらず

古今（マヽ）

秋風にさそハれわたる鳫金ハ物思ふ人の宿をよか南

秋ハ愁いノ比なれバいとゞしく物思ふやどの秋風にさそハれて鳴かりをきけバいよ〳〵物思ひもまさればそのあたりをよきてとをれと云歌也。物思ふ人とハ我事也。

夏山に鳴郭公心あらバ物思ふ我に声なきかせそ

此歌と同じ心也。

式部内親王　萱齊院准三条高倉宮

後白川院　高倉院

殷富門院

十九ウ

新古

式子内親王

千度うつきぬたの音に夢さめて物思ふ袖の露ぞくだくる

歌ノ心ハいつも愁アル人ノ袖ハ涙ノひまもなし

然ニ砧秋ノあはれをもよほしがほに幾千度ともなく夢うちおどろかす祢覚ノ床ハ思ひのあるに聞そへて心をくだく露のたもとよとうちなげく心也。まことにことはり過テ覚る也。五もじよりして露ぞくだくるといふまでつよくしてしかも面白歌也。

砧ハ恋に縁ある物なれバうつ人も誰をかまつなど聞テよミ給へる心尤感アリ

八月九月正長夜　千声万声無了時

二十オ

大弐三位　高藤　三条右大臣定方　右大弁朝頼

権中納言為輔　富孝　女子大弐三位ト号ハ

太宰大弐成章

妻ニヨリテ也

後一条院御乳母紫式部

千載

はるかなるもろこしまでも行ものハ秋の祢覚の心なりけり

秋ノ祢覚ニ色〳〵の思ひヲ心にもちてそれをいひいだ

さずしてかくよめる事限なき心也。

定家 心のみもろこしまでもうかれつゝ夢ぢにうとき月の比哉

家隆 思ふことまだつきはてぬ秋のよのね覚にまくる鐘の音哉

枕上片時春夢ノ裏行尽江南ノ数千里

大納言　宇田天皇　一品式部卿敦実親王

左大臣号六条重信女子　権中納言通方　権大納言卿経信

従四位木工頭俊頼　俊恵

金葉　百

夕されば門田のいなば音づれてあしの丸屋に秋風ぞ吹

此歌ハ田家ノ秋風といふ事を読り。あしのまろや

とハさながらあしばかりにて作れるヲ云也。門田

の稲葉に夕ぐれの秋風そよ〳〵吹と見れば

きゝもあへずやがてあしの屋に音信たるさま也。此

夕され夕暮に同じ。但聊風情をもつ心有り。

毎夕の心有べきにや、又夕されの事ふかくいはゞ
夕にあればといふ心也。春されなどいふ同心成べし。
春され夕されの時ハばと云べき也。春されの夕されの
とハいはれずと也。但慈鎮和尚ノ聖廟法楽ノ百首ニ
夕（マ）されのあはれを誰かとハざらん柴のあミ戸の庭の松風（、）
とあり殊ニ自筆の歌ヲ御覧じて慥なりとあり。但
不審なりと御講釈ノ時仰せられしなり。如何

寂蓮法師　俗名中務少輔定長

俊成卿養子

新古

さびしさハその色としもなかりけり槇立山の秋の夕ぐれ

槇たつ山といハんとてその色としもなかりけりといへり。
その色とハもみぢなどの事也。祇注ニまきたつ山の秋
の夕暮ハうつろへる木の葉をミるよりも猶さびし
きとあり。まことに紅葉などの散などするハ結局
なぐさミもある物也。是ハ手もつかぬさびしきなりと
いふ歌也。その色としもなきと序歌のやうに

ミる也。只ミると云両義何をも用也。

式子内親王

新古

それながら昔にもあらぬ秋風にいとゞながめをしづのをだ巻
秋風ハ昔も今もそれながら我身ひとつに愁のある
ゆへにあらぬやうにおぼゆると也。かの業平の月や
あらぬの歌にかハりたる事なし。月花も平人ハ
ミるに物うからず愁ノある人ハミるに嘆の色有
べし。いとゞながめをうづのをだまきとハ昔をい
まになすよしもがなの古今の末を云残したる
心也。御身のよはひもふりゆきつらき事のミ
にて昔のミ悲しくおぼしめして此秋風を聞くに
なぐさむ事なけれバ昔を今にかへしてもとの
秋風にあハばやと読給へり。まことに妙なる御詠なり。

文屋ノ康秀　古伝云　宗平子陽成院

御時人云々不詳或中納言朝康子
云々縫殿助　後二三河守号文琳

古今　百

吹くからに秋の草木のしほるればむべ山風をあらしといふらん

説ノ多歌也。木毎ニ花ぞさきにけるを木偏ニ毎ノ字
ヲ書梅ノごとく云などし山かぶりに風とかきて嵐と
読などするとすると云説あり。当流ニハ不用也。只あらき
風也。ムベハ宜応諾此字也。げにもと云心也。康秀家
ノ集ニハ野べの草木とあり。昔ハ嵐ヲ秋に用タル
ト也ソレヲ勿論と思ひて野べの草木と読たり。古今
秋ノ部ノ巻頭ニ入時。猶慥ニト思ひテ秋の草木と
貫之の直シテ入タリ。歌ノ心冬枯れニなれバ風ニ力もなき
物也。秋木葉のある時分風あらくさかひて力も
ある也。それに吹くからにとをけり。吹からハ吹当位色も一向
に別ノ物ニなれバけふも秋風にあたり、色のかハれば
尤山風ヲあらしといふらんと読たり。ムベト句ヲ切
テ山風ヲト可意得ムベノ両字が領解シテ納得シタル心也。

二十二ウ

【以下二十二ウ頭書】

後京極殿出題覊中嵐一座各雑ノ歌ヲ詠ゼリ摂政殿初ハ秋ノ歌ヲ詠給シヲ一座雑ノ歌ヲ詠給故ニ雑ニ詠アラタメ給

也。天下ノ好士ニ恥カヽセジトテ也。定家卿慈鎮ハイカヾト尋申タルニ摂政御会衆ニマカセヨト返答有シト也。

【以上二十二ウ頭書】

人丸

古今

さをしかの妻とふ山の岡辺なるわさ田ハからじ霜ハをくとも

丘べの田ノ面ニ鹿ノ鳴ヲ聞テ霜をくまでもからじと

いへる也。誠色付タル稲葉ニ鹿ノ音ヲ聞そへんさまお

もしろくもあはれにも侍べき也。早田ハ夏ノ末ヨリ

かる物也。霜ハ秋ノ末ノ事也。早田ヲ見テ霜ハをく

ともとあらましの義也。吟味たゞならず殊勝の歌トゾ

よミ人しらず

古今　百

おく山に紅葉ふミ分鳴鹿の声きく時ぞ秋ハかなしき

御説猿丸歌也。されども是貞ノ歌合トありさる丸ハ

元明ノ比ノ人也。是貞ノ時分ノ人カ談合タルカ又猿丸ノ

歌ヲ其比ノ作者家集ニ書出タルカ不審也。もとの抄

にハ山ノ紅葉ハ散テ奥山ノ木ノ葉ちる時分其

かげを鹿ノたのミて鳴くといふ也。是ハあやまり也。もみぢハ
奥山よりちりは山がをそき物也又庭などに有
ハ山よりも猶後に色づきちりなどする物也。花ハ
又もみぢにかハりては山よりさき次第山ふかくさき
侍る也。此歌ハ秋ノ何時かなしきといへば鹿の打侘テ
鳴秋がいたりてかなしきと云義也。此秋ハ世間ノ秋也。
声きく人にかぎるべからず。されば余情かぎり
なき歌也。いづれノ先達ノ義ニカ侍ケン月やあら
ぬほどの歌といはれけるとぞ

俊恵立田山梢まばらになるまゝにふかくも鹿のそよぐなる哉

菅家　参議刑部卿是善卿三男云々
後贈太上大臣延喜三二廿五薨

古今

秋風の吹あげにたてる白菊ハ花かあらぬか波のよするか

吹上紀伊国名所也。菊を読る所也。是は古今詞
書に同じ御時せられけるきく合にすハまをつくり
てきくの花うへたりけるにくはへたりける歌ふき上

のはまのかたにきくうへたりけるをよめるとあり。州浜ノ台ノ事也。うたがふ文字ハかさねて置ものなり。是ハカ文字三ツあり一段物をほめて云心也。色々の物に比シテ盛(感乎ママ)にたへずと云義也。景気ノ歌也。カノ字ヲかさねずしてをくてにをハ大事の物也。白玉か何ぞと人のよ云歌ハ白玉か何ぞとうたがひてをけると也。常にハうたがふかナドヲバカサネテ置也。

はるゝよの星か川辺の蛍かも我すむ方のあまのたく火か

凡河内躬恒　先祖不見古伝云甲斐権少目(サクハン)

延喜七年正月十三日任丹波権大目

御厨子所ノ預祇注行氏孫湛利子

凡ハ姓也。又甲斐少目良尚子云々

古今　百

心あてにおらばやおらん初霜のおきまどハせる白菊の花

おらばやおらんハ重詞也。おらばおりこそハせめと云義也。菊をも霜をもともにとしたる歌也。初霜ノ初ト云字に力ヲ入テミる歌也。はつ霜なれば霜をも

いまだ見ならはぬ間花やらん霜やらん分別
せずと云歌也。

貫之

古今
白露も時雨もいたくもる山ハ下葉のこらず色付にけり
守山近江ノ名所也。物ノ本にて用時ハもる山世
俗にハもり山也。是ハ一段たゞしき歌也と云。露も
時雨ももる山ならば下葉までもみぢの色残ま
じき也。いたくハ事外つよくもる義也。時雨ばかり
ふるならば梢ばかりも色付侍べきに下露打
そひて侍ればいろづく事の残るまじきと読る
歌也。

人丸

古今
立田川もみぢハながる神なびのみむろの山に時雨ふるらし
神なびなびをミともびとも不聞やうによむべし
と也。今ふる時雨を見かけて云たるにてハなし。れん〳〵

時雨てこそ此川へもみぢのながるらめと也。此比時雨
がちなれバ川の見かさもまさりてながるゝなどい
はねども余情にみえたり。家隆ノ此歌ヲ嵐吹
らしと読たきといはれしを定家事外無興ト
也。時雨のそめつくしてと云心面白と也。その上時雨
といひて嵐などもこもるべしと也

矢田の野にあさぢ色つくあらち山嶺の淡雪寒ぞ有らし

よミ人しらず

古今

秋ハきぬもみぢハ宿にふり敷ぬ道ふミわけてとふ人もなし

秋ハきぬ初秋にあらず秋ノゆきぬる也。上略ノ詞也。
秋ハ過ぎぬ行ぬの心也。秋ハくれ紅葉ハ散敷て宿
とふ人もなきをさびしさの至極したるといひ
残したる所この歌の感たり。能々可味也。

在原業平朝臣　桓武天皇

平城天皇　阿保親王

大江音人

在原行平

業平　父行平同母ハ

桓武御女伊豆内親王

仲平

古今　百

千早振神代もきかず立田川からくれなひに水くゝるとハ

二条のきさきの春宮のミやす所と申ける時に御屏風に立田河にもみぢながれたるかたをかけりけるを題ニテ読ると古今ノ詞書ニあり。紅葉ノ立田川にひまなく敷たるをいひてん。やうなけれバ神代にハ奇妙の事あれども如此事ハきかずと云也。神代にもきかずハ日本にもきかず然バ大唐にもきかずと東宮ノ母后をほめていへる也。祇注ニ秋ノ暮又ハ神無月ばかりに立田河のながれもなきまで散り敷しけるもみぢに水ハ紅をくゝるやうなる興ヲ神代にもかゝる事ハ聞かずと也。業平ノ歌ハ多分心あまりて詞たらぬを是ハ心ことばもかけたる所なけれバ大切なりと

二十五ウ

あり。されば定家卿百人一首ニ被撰入。又秀歌
体大概にも入らるゝ也。是ヲ以テ百人一首並ニ此
詠歌大概ノ趣ヲ見侍るベキトゾ。又此歌伊勢
物語にハ昔男見こたちせうえうし給所に
まうでゝ竜田川のほとりにて読りとあり。作
物語なれバ如此なるべし
神代にハ有もやしけん桜花けふのかざしにおれ〔マヽ〕るためしは
立田姫手そめの露の紅に神代もきかぬ嶺の色哉

春道列樹　延喜比人文章博士雅楽頭
新名息云々未詳

古今　百

山川に風のかけたるしがらミハながれもあへぬ紅葉成けり
是ハ志賀の山越ニテよめる歌也。木の葉のながれて
せかれたるをしがらミといふにてハなし。紅葉を間
断もなく吹かけ〳〵するを風のしがらミといへり。惣
の心ハ只山ト川トノ眺望成べし。風のかけたるしがらミ
誠はじめて云出たり。妙文なりとぞ。又あへぬといふ詞

に心あまたあり。

古今貫之 千早振神のいがきにはふくずも秋にハあへずうつろひにけり

同読人不知 秋風にあへず散ぬる紅葉丶の行末さだめぬ我ぞかなしき

是ハ不堪の心也。

から錦秋のかた見や立田山散あへぬ枝に嵐ふく也

是ハひたつゞきちるやうの心也。

定家 秋とだに吹あへぬ風に色かハる生田の森の露の下草

是ハ秋とだにまだ吹さだめぬやうの心也。その物に

まだならぬ心と云々ながれもあへぬ紅葉といへるハ

如注ながるゝとミれば又ひまなく散かゝりたる心也。

源信明

新古

ほの〳〵と有明の月の月影に紅葉吹おろす山おろしの風

ほの〳〵と明る有明と家集にハあり。もみぢのちるを

人々のミる所かきたる内の御屏風の歌也。月も

有明になり梢のもみぢばもすくなく風の音も

物すごき時分の言語道断景気ヲ能思ふ

二十六ウ

べし卅四字あれども耳にたゝず当意即妙の歌也。

太上天皇　後鳥羽院

新古

ふかミどりあらそひかねていかならんまなく時雨のふるの神杉

時雨ハそめんとし杉ハふかミどりにてつれなければ

更にあらそふ様にミゆるけしきを興ジテよめる歌也。

万葉時雨の雨まなくしふれば槇の葉もあらそひかねて色付にけり

西行法師

新古

あきしのや外山の里や時雨らんいこまのたけに雲のかゝれる

秋篠大和ノ名所也。いこま山近き所なれば思ひ

やりてよめる歌也。立田川もみぢばながるノ歌の一体也。

いこまの山に雲のかゝるを見やりて秋篠や外山ノ

里や時雨らんといへり。たけ有テ無比類歌云々

清輔朝臣

新古

冬枯の森の朽葉の霜の上に落たる月の影のさやけさ

二十七オ

さしも夏ハ木ふかく見えしが光陰のうつるを先見て
一段感有べき体也。落たる月入方ノ月にハあらず
朽葉の上に梢さハる所なき間影すミやかに
うつれるさま也。
東坡後赤壁賦ニ
是歳十月望歩レ自ニ雪堂一　雪堂ヲ作時雪大雪降也。
是ニヨリテ雪堂ト名付
タルニ其壁ノ四方ニ雪
ヲ絵ニカケル也
将レ皈ニ于臨阜一二客従レ予過ニ黄泥之坡一霜露
既ー降木葉尽ー脱人影在レ地仰見ニ明月一　云々
同
新古
君こずハ独やねなんさゝの葉のミ山もそよにさやぐ霜よを
あし曳の山どりの尾のしだりおの歌なども同心也
此歌ハ思友をこよひ待つけて御出もなくハ独ねん
ずるに尋きたりたるを一段感ジテ云也。逢恋などの

二十七ウ

歌を雑ニ入たる也。祇注ニ石見より人丸のぼるとて
篠のはゝミやまもそよにさやぐめり我ハいもお
もふ別きぬれバまづ此歌ノ心ハさゝの葉ハ風に
こなたかなたなびきやすき物なるを我ハそれ
にかハりて一すぢに妹を思ふと也。この歌をとりて
読り深山の恋などの心也。悲しき歌なるべし。

摂政太上大臣　後京極

新古

かた敷の袖の氷もむすぼゝれとけてねぬよの夢ぞミじかき

かたしきとハ寒夜に独いねたるかたしき也。袖の氷
とハ涙也。思ひのむすぼゝれとけてねぬをミじかき
夢とハいへり一段寒夜の体あハれなる歌也。

人丸

新古

やたのゝにあさぢ色つくあらち山嶺の淡雪寒ぞあるらし

之も思ひやりたる景気也。祇注に矢田野あらち
山越前の名所也。高山にて秋より雪ノふる所也。

二十八オ

されども矢田の丶あさぢハ色付にあらち山にハあハ
雪のふると也。うたさまからびたり。
よミ人しらず

古今
古郷ハよしの丶山し近ければひとひもミ雪ふらぬ日ハなし
吉野ハ皇居ノ在所なれば古郷といへり。さびしき
心也。山の近ければハ(ママ)一日もふらぬ日ハなしと也。又
毎日ハふらずとも心に晴ぬ体也。ミ雪といふ事
深山のミの字ニテ有べし。日本紀ニ(ママ)書テミ山トヨ
マセタリト顕昭言出シタルヲ定家ノ同心有テ以之
為指南といはれしと也。顕昭常に色々ノ或説ヲ云
物なれども善従(ママ)ト云道ヲタテラレタリ如何物也歟。
よミ人しらず

古今
今よりハつきてふら南我宿のすゝきをしなみふれる白雪
ツキテハ相続シテフレト也。之ハそとふりて薄の上ノ
なびきなびかぬ程ノ雪也。雪ノふかくふりて薄を

をしなびかしたるとハミるべからず。すゝきをバすがた
を残してそとをしなびかしたる雪なれバ興じて
是ほどに相つぎて又ハふり又ハふれといへりふると
云文字二あり。昔ハかくも有し也、されどもこれハこの
ふれる雪のごとく又ふれといへバ格別也。源氏ニ
雪ハたゞ松と竹とのけぢめミゆるほどなるがおも
しろきと此歌をとりてかけり。物のけしきの
見ゆる程なるがおもしろき物也。

坂上是則　田村丸　広野　当常

左馬頭好陰　大内記五位是則　望城

古今

朝ぼらけ有明の月と見るまでに吉野ゝ里にふれる白雪

あさぼらけハ夜の明行時也。朝旦朝朗明旦イ
ヅレモ朝ぼらけ也。里トをかでハいはれぬ歌也。有明ハ
空にハなくてこゝに月の影のある間近々とみて
此如読也。有明の月と見てよしのゝ里にふれる
白雪と読也。うすくふるゆへに野山の草木其

姿相かハらざるを月かとミるといへり。

為家 さらでだにそれかとまどふ山のはの有明の月にふれるしら雪

後京極

新古

石上ふるのゝ小篠霜をへて一夜ばかりにのこる年かな

石上ふるハ玉ほこの道などいふごとく枕詞也。又石上布留つゞきたる大和の名所也。歌ハ歳暮の心也。

初霜ノ比よりれん〳〵の心をそへて見侍るべき也。一とせをゝくりしハはるかに思ひしも一夜になりぬる事をおどろきたる除夜ノ心也。

経信

後拾遺七

君が代ハつきじとぞ思ふ神風やミもすそ川のすまん限ハ

君が代を千秋万歳と祝したる歌也。ミもすそ川のながれ是もつきずすむべきながれ也。天照大神ノ御末なれバかくいへり。すまんかぎりといふハ黄河にごりたる河也。千とせヲへてすむといふすまん

かぎりハ聖代にてある故に云也。祝意の歌ハ
おもしろきハまれなるに是ハ長たかくきよらにす
ぐれたる名歌也。

僧正遍昭　号花山院僧正　桓武　姓良嶺大納言安世
宗貞仁明御薨、日出家卅一遍昭是也

三十オ

新古

末の露もとのしづくや世中のをくれさきだつためし成らん

家ノ集ニハ世のはかなさの思ひしられけれバとあり
哀傷ノ歌也。末ノ露と思へば又落テもとのしづく
となりたるさまをくれさきだつ世にたとへて云ヘル也。
此歌新古今ニ入リ後京極殿へ定家卿古今ニ入タル
と思ふに残けるよと有しに一昨日有家もきて
さやうに申されしと被仰しと也。

同

古今

ミな人ハ花の衣に成ぬ也苔のたもとよかハきだにせよ

古今詞書に深草の御門ノ御時に蔵人頭ニテよる

ひるなれつかうまつりけるを諒闇ニ成にけれバ更ニ
世にもまじらずしてひえの山にのぼりかしら
おろしてけり。その又の年ミな人ハ御ふくぬぎて
あるはかうぶり給りなどよろこびけるを聞テ　三十ウ

【以下三十ウ頭書】
古今ノ序ニ六人ヲアゲテ歌ノ心ヲシレル人ト云タリ其中ニ得タル詩文所アリトアリ是ハ少ノ得失ノ事ヲ云也。後
鳥羽院定家卿ニ此六人ノ中何レゾト尋給シニ遍昭　ヲ申サレケレバマコトスクナクハ如何ト仰ケルニソレヲ歌と
は申ト勅答有シト也。　物イハヌ雪月花紅葉ナドニ心ヲ付ル所歌ナレバ此随本相叶也。遍昭家集深草ノ

【以上三十ウ頭書】
よめる遍昭ハ仁明ノ御時つかへて御目ヨかけられ
たる人也。御葬場ニテかしらおろしたる人也。慈覚大
師ノ弟子ニ成タルト也。あるハかうぶり給ると云ハ文徳ノ
御代ニなりての事也。爵ヲ給るとハ五位ニはじめて
なる事を云也。歌ノ心ハ詞書にて能聞えたり。月
卿雲各のあたらしき御代に成テ悦ヲキゝテ
我ハせめて袖ノかハき成ともせよと云也。御別ヲ
ふかくなげく心見えたり。忠臣二君ニツカヘズト云

道ヲタテタル人也。

和泉式部　和泉守橘道貞ガ女ニ成ニ
ヨリテ和泉トハイヘルナリ

大江惟致（ムネ）　和泉式部　上東門院
女房

金葉

もろ友に苔の下には朽ずしてうづもれぬ名をミるぞかなしき

小式部内侍うせて後上等門院より年比給はせたる
きぬを趾ニもつかハしたりけるに小式部内侍と書　三十一オ

【以下三十一オ頭書】

御門カクレヲハシマシテカヘラン世ヲミンモタヘガタクカナシ蔵人ノ頭ノ中将ナドイヒテ夜昼ナレツカウマツリテ名残ナカラン世ニマジラハジトテ俄ニ家ノ人ニモシラセデヒヱニノボリテ頭ヲロシ侍テ思ひ侍シモサスガニヲヤナドノ事ハ心にカヽリ侍ケンたらちねハかゝれとてしもうば玉の我くろかみハなでずやありけん

【以上三十一オ頭書】

付られたるを見てよめる。金葉の詞書也。此詞書
ニテ歌ハかくれたる所なし。さなきだにわするゝ事の
なきに小式部世に有し時給つけたる衣などに

名のかき付テあるを見て今一しほのかなしびも
まさるべし。尤あはれふかしうづもれぬ名を見
るぞかなしきおもおしろし。当時ならばきくぞと
いふべし。ぜねて名を見きゝもせざるやうにとわび
たる歌也。あはれふかし。

藤原道信朝臣　九条右大臣師輔　法性寺恒徳公為光　右中将従四上道信

拾遺廿

限あればけふぬぎすてつ藤衣はてなき物ハ涙成けり

父ハ恒徳公也是ハ父ノ喪ヲぬぎての歌也。はてなきとハ一廻ヲ云
心也。かぎりあることなれば服衣ヲバぬぎても涙ハ
猶とゞまりていつをかぎりともなしといへり。尤哀深し。

後鳥羽院

新古

思ひ出る折たく柴の夕煙むせぶもうれしわすれがた見に
此の御製ハ慈鎮和尚ノ母うせにし時あそばしたり。
天子ノ御身ニテ臣下ノ母マデヲあはれび給ふ御心
まことに忝事也。思ひ出る折たくハ折という字を

かねたり。

おもひ出るときハの山の岩つゝじいはねバこそあれ恋しき物を

是も思ひいづる時とうけたり。哀傷ノ歌にうれしき

など云詞引きかへめづらしき也。それハ其人の忘れがたミな

れバつらからぬと也。あはれふかく詞ノつゞき奇妙

なる御製也。

慈鎮御返歌

おもひ出る折たく柴ときくからにたぐひかなしき（マヽ）夕煙哉

同

なき人のかた見の雲やしほるらん夕の雨に色ハミえねど

雨中無常と云心也。其人ゆへ千万行ノ涙ノ袖をなき

人ノあはれと思ひてかた見の雲とハなれるかと也。

宋玉ガ高唐賦ニ楚ノ襄王云々夢見二一婦人一曰

妾巫山之女也。為二高唐客一聞君遊二高唐一願薦二

枕席一王因幸レ之去而辞曰妾在二巫山之陽

高丘之岨一旦為二朝雲一暮為二行雨一朝々暮々

陽台之下旦朝視レ之如レ言故為立レ廟曰二朝雲一

三十二オ

朝為二行雲一暮ニハ為行雨ト山谷ノ注ニハアリ
夕ノ雨ノ物あはれなるにうち詠バ何とハなくあハれ
にかなしきハ形見の雲こそしほるらめとなり。
時雨らめと云本もあり。しほるハまさりたると也。

中納言行平　阿保親王子 平城天皇孫

古今　百

たち別いなばの山の嶺に生ふる松としきかバ今かへりこん

いなばの山美濃又因幡両義也。いづれにても
有べし此歌俊成卿ノあまりにくさり過テよろし
からず侍を今かへりこんといひながしたる所尤幽
玄なるといはれたると也。我こゝをたち別ともまつと
いふ人だにあらバかへりこんといへりまつ人ハあらじ
と思ふ心をかく読る也。

貫之

古今

白雲の八重にかさなる遠にても思はむ人に心へだつな

白雲の八重にかさなるとハ遠心也。八重といふハ

はかりもなく遠義也。八ハ陽ノキハマリ也。八百万神
と云も此心也。をちにてもハ遠ノ字又外と云字
をも書也。思ハん我に心隔など云べき所ヲ大やうに
総別ノ人ノ心に読たる所大キナル歌ニテ面白キトゾ

行平

古今

わくらバにとふ人あらバすまのうらにもしほたれつゝ侘とこたへよ　三十三オ

【以下三十三オ頭書】

をち遠又ハ彼中臣祓ニ彼方ヤシゲキガモトヲトカケリ

【以上三十三オ頭書】

詞書につみにあたりてとあり。わくらバまれにと
云心也。邂逅と書り。此五文字肝要也。勅勘ノ事な
れバ誰もとふ事ハあらじ若とハゞかくもしほ
たれて侘ぬるとこたへよと也。あはれふかき歌也。

菅家

古今　百

此たびハぬさもとりあへず手向山紅葉の錦神のまに〳〵

是ハ宇田御門奈良へ行幸ノ時供奉シテよミ給ふ
也。此たびハ旅ノ字ト云義もありその心もたがふべから
ずといへども猶度ノ字よく侍也。御供奉ノ時なれ
ば私ヲカヘリミヌ義ニテ神ニ幣帛をもさゝげ
ぬと也。されども紅葉のにしきを其まゝ手向と也。
手向山ニミち〳〵たる紅葉なれども共する人な
けれバ神ハうけ給はぬ物なれバ如此也。手向
山相坂にもあり

祇(ツヽシミテ)レ役遇(エキフテ)レ風(ニ)謝(ス)二湘中(ノ)春宮(ヲ)一　熊孺登(ユウジュトウ)ジ
水生(ミサンニ)風熟(シテフ)布帆新(ナリ)　只見(テ)二公程(ヲ)一不レ見レ春(ヲ)
応レ被二百花(ノ)繚乱(タルニ)咲(レ)一　比(ヒ)来天地(ノ)一閑人

此詩ノ心モ御使ナレバ不私ト云作意ノ詩也。

俊成

新古

難波人あし火たくやに宿かりてすゞろに袖の塩たるゝかな
あし火たくあまの家に宿かりてあはれなるさまを
かくよめり。すゞろとは心ならずよその事までふと

三十三ウ

あはれに思ひ入てぬるゝ袖なりと云也。すゞハ蘆の縁語なればいふ也。たゞハそゞろと云べし。

同

新古

立帰またもきてミん松島や小島のとまや波にあらすな

松島奥州ノ名所也。眼前面白難忘興に乗じて又もきてミんと云也。此度ハ日をさしたる旅ナレバとうりうすべきやうもなし。此所の景気言語道断なれバ立帰又こんといふ也。されば波故に此景をうしなハずしてをき給へと也。残おほくかへる所ヲなぐさめて又もきてミんと云義也。

家隆朝臣

新古

明バ又こゆべき山の嶺なれやそらゆく月の末の白雲

旅ねの月ノ行衛遙なる山ヲ明ば又我越べきと旅行ヲ打侘て読る歌也。あけバ又といふ又ノ字に心ヲ付べし。昨日けふまでいくつの山ヲ越テき

三十四オ

ぬるに又空行月の白雲にそびえたるをミてさても
こと〳〵しき高山哉こよひハくれぬれバ旅ねし
てあすハまた越べき事よと侘たる歌也。

俊頼朝臣

千載

難波江のもにうづもるゝ玉かしわあらはれてだに人を恋ばや
恋ハ忍を道とするにあらハれてだにといへる心
尤切なる恋にや。相坂山のさねかづ人にしら
れでなどゝ人にしられもせでハ無由たゞあらハれ
てといへり。序歌也。此玉かしわとハ石の事也。
玉柏ぬるや川べのしのゝめに人にあひミし君にまさらじ
あさかしハぬるや川辺のしのゝめに思ひてぬれバ夢に見えつゝ
などあり。

後京極

新古

もらすなよ雲ゐる嶺の初時雨木のはゝ下に色かハるとも
我思ひハ説なれどももらすなといへり。初時雨といへる

ハ初恋ノ心也。木葉ニ我心ヲよそへて云也。心ノ色ハ
かハるとも色ミえぬ物なれバ袖の涙とハなさじ
とせいしたる歌也。

よミ人しらず

後撰　恋二

東路の佐野の船橋かけてのミ思ひわたるをしる人のなき
かけてといはんための序歌也。舟橋ハ上野也。思ひ
わたるをしらぬとなげく心也。思ひ渡るとハ久き心有
万かミつけのさのゝ舟橋とりはなし親ハさくれど我ハさくるかへ
へノ字ハソへ字也。さくるかと云也。

参議等　嵯峨天皇　広大納言弘希　参議等済後撰作者

後撰　百

あさぢふの小野のしのはら忍ぶれどあまりてなどか人の恋しき
是もしのぶといハん序也。忍べども〳〵あまりてと云
心也。尤恋の本意なるべし。あまりてなどかと云
所に能々心ヲ付テ見侍べき歌也。
定家なおざりの小野ゝあさぢに置露も草葉にあまる秋の夕暮れ

三十五オ

右ノ歌ヲとれり

俊成卿

千載

いかにせむむろのやしまに宿もがなこひの煙を空にまがへん

此の五文字いたりて切なる時打侘テ思案にもくづおれて云へる心也。下野国ノ八島ハ常にけぶりのたつ所なれバ此所を宿にして我思ひの煙をまがへんといへりねがひてもかなハねバいかにせんといへり。こひ思ひ何も火と云字ノ心下にこもる也。此五文字せう〳〵にてハかけあハぬ物也。

いかにせむさらでうき世ハなぐさまずたのめし月も空にくもりて

座敷ふたげに此五文字をきてハ曲なかるべし

学者も心ヲ得べし

よミ人しらず

古今

夕暮ハ雲のはたてに物ぞ思ふあまつ空なる人を恋とて

祇注に雲のはたてとハ夕の空に旗の手のやう

三十五ウ

になびきたる雲を云也。そのごとく思ひみだるゝと也。
御説に順が詞に思ふ心雲のはたてにとあり。只乱
たる心也。源重之が蛛ノ死したるを見て
さゝがにのくものはたのさハぐ（マヽ）かな風こそ虫の命成けれ
とよめり。万葉にくにのはたてといへるは国に物ノ
みちたる心成べし。又夕日の山に入がたの光さし
のぼりたる体と云義も在之

伊勢　内麿　真夏　浜雄
家宗　継陰　女子号伊勢七条后宮女房

新古　百

難波がたミじかきあしのふしのまもあハでこのよを過してよとや
このなにハがたとハ大やうに云いでたる也。五文字に君
臣ノ心あり。これハ君の心にて大やう也。またひしといひ
つめて詮となるもあり歌の心ハ思ひそめしより此
かた人にも縁をもとめ詞をつくし心をくだきある
ハたのめて過しあるハ又かけはなれずして年月
をかさぬればさてもいかゞハせんと思ひあまり

三十六オ

三十六ウ

たるうへにうちなげきていひ出したる歌也。ミじかき
あしのふしの間もとハいさゝかばかりもと云心也。か
やうの歌を大方に見侍らんハくちおしき事とぞ。
一首のすがた吟味殊勝なる歌なり。

俊頼

千載　百

うかりける人をはつせの山おろしはげしかれとハいのらぬ物を

此歌ハ祈不逢恋と云題にてよめり。初瀬に恋
を祈事住吉物語由来也。泊瀬ハ山中ニテ谷
風はげしき所也。惣の心ハうかりける人をはげしかれ
とハいのらぬ物をと云也。山おろしハはげしきとい
ハん枕ことば也。いのれども〳〵人の心ハはげしけれ
ば只はげしかれと祈たるやうなれバそれをかく
はげしかれとハいのらぬ物といへり。定家卿近代秀
歌にもこの歌を心ふかくこと葉心にまかせて
学ともいひつゞけがたく誠に及まじき姿なりといへり

定家年もへぬ祈思（マヽ）ハはつせ山尾上のかねのよその夕暮

はつせ恋を祈所によまれたり。

崇徳院御製　鳥羽院第一皇子　母待賢門院　白川院猶子　実ハ大納言大君

詞歌　百

せをはやミ岩にせかるゝ滝川のわれても末にあハんとぞ思ふ

心ハ岩にせかるゝ水われても末にあふ物也。つらき人も別て後ハあひがたきをわりなふも末にあハんと思ふハはかなき事ぞとうちなげき思ひ返していへる也。われてもとハわりなきと別とをかねたる詞也。伊勢物語にふつといふ夜われてあハんといふもわりなき心也。

金葉三日月のおぼろげならぬ恋しさにわれてぞ出る雲の上より

詞書にうちをわりなく出てとあり。

伊勢

後撰

おもひ川絶ずながるゝ水の淡のうたがた人にあハで消めや

祇注ニ心二ありとあり。一ニハ仲平（マヽ）と云男ノ有しが伊

勢が死たりと聞しといへりけれバ読りといへり。今
一ニハしバしも人にあハで消めや善悪はかなき身
なりとも思ひをとげんと云たる心也。うたがたハ水の
あはの事ながらいかでかなと云詞也。又暫もと云
心モあり。うたがたと句ヲ切テ人と清テ読也。六字ハつゞかず。
万はなれそにたてるむろの木うたがたも久しき年を過にけるかも
同鶯のきなく山吹うたがたも君が手ふれぬ花散めやも
二首ながら一向に水の心なし。源氏に
玉かづら（マヽ）ながめふる軒の雫に袖ぬれてうたかた人を忍バざらめや
仙源抄未必人ウタガクヒトさだめなき人也。又ハすこしと云
日本紀
心也。万葉にも此心あるにや
定家卿云うたがたとハ真名ニ寧などつがへる詞
のやうに思ひよることかさなくてハいかでかハと云
よし也。それを此うたがたとハうたてという詞也。それ
を水の淡にそへて云也。此歌一をミてうきたる人と
云よしにうたがた人とハ六字につゞけて読りと云
説ハふかく見わかでのべやる説なり。四文字の詞也。

人丸

拾遺　恋二

なき名のみたつの市とハさハげどもいさまだ人をうるよしもなし

市とハさハがしき物也。そのごとく我名ハたちさハげ

ども人にハあはぬ心也。うるよしもなしハ我物に

ならぬ心也。又市の縁語也。

西行 なき名こそしかまの市に立そ(マヽ)むれまだあひそめぬ恋する物を

定家 敷島の道に我名ハたつの市やいさまだしらぬやまとことのは

伊勢物語にえうまじう成テ同心也。

よみ人しらず

かたいとをこなたかなたによりかけてあハずハ何を玉のをにせん

こなたかなたとハとやせましかくやせましなど思ひ

めぐらしてさてあハずハ何を命にせんと也。種々案

ずるに了簡してもあふ道ハなきぞと侘たる義也。又

こなたハ我思ひかなたハ我思ふ人の事也。思うふ人と我と糸

によるにあハずハ玉のをに何をせんと云義也ト云。

俊頼朝臣

三十八ウ

金葉

思ひ草葉末にむすぶ白露のたま〳〵きてハ手にもたまらず

此草を露草といふ説あるを通具のたゞいかやう
なる草なりともはかなき草と心得べしといはれ
たると也。玉さかに待得たる人のやがて立かへりなど
するをうちなげきて読る也。序歌也。心ハ明白なり。

俊成卿

千載

思ひきやしぢのはしがきかきつめて百夜もおなじ丸寝せんとハ

臨期変約恋といふ題也。古キ物語ニ車ノしぢをか
ぞへて百夜かよひたらバ女あハんといひたり其やく
そくにまかせてかよひけるに明日百夜と云時
おや死したりとて其さはりにてえあハぬと云也。
悉皆物語の古事にて百夜ながら丸ねをせん
とハおもハざりしにと侘たる歌也。

壬生忠峯

古今　百

三十九オ

有明のつれなくみえし別より暁ばかりうきものハなし

名誉ノ歌也。是ハ逢無実恋也。扶桑璞林集
百帖有物也。当代ハみえぬ物也。嵯峨天皇以来
の歌ヲ集タル物也。それにハ不逢帰恋と有
定家ノ心ハあはで帰恋ニテあるとみえたり。人のもと
へ尋よりて心をつくしても人ハつれなくてはてぬ
れバいかゞハせんと立別比有明の月のあはれも
ふかきを詠つゝかへるさま也。たとひあふ夜の帰るさ
成ともかゝる空ハかなしかるべきを結句あはで別
を思ひ侘テ今夜の暁ばかりうき事ハあらじと
思うふ由也。あかつきばかりをあかつき程と云ハわろし
量此字也。只あかつきと云心也。心得にくけれバ
程と云字をもゆるす也。後鳥羽院御時俊成
定家家隆へ古今第一ノ歌いづれぞと御尋あり
けるに両卿ハ此歌ヲ書被進也。俊成ハ此歌
にむすぶ手ノしづくににごると云歌を書
加テ進上云々此別より暁がうき物に成たると也。

三十九ウ

定家ハつよき所を読俊成ハやハらかなる所ヲ
読れたる也。定家ハ建保ノ時代ノ歌ふきそゝ
ぎたれバつよき所をよまれ俊成ハ金葉詞
花ノ時代歌さまあしく成たるによりて又うつ
くしき所をよまれたると也。時代〳〵に目ヲ
付テよめれバ能々左様の所を了知するべし。

よミ人しらず

古今

名とり川ぜゞの埋木あらハれバいかにせんとかあひミそめけん
人もゆるさぬ事を思ひの外になれそめておもひ
つゞくればいかにせんとてかあひミそめけんと世
のつゝましさせんかたなきをなげきけるにこそ
侍らめと僻案抄ニ書給ひしをそのまゝうつし
置所也。返々殊勝ノ歌成べし。あらハればを顕
昭てといへり。あらハれバ可然也。名とり川の水も土
もうづもれたり。然ども若あらはればいかにせんと
おもひてあひそめたるぞとなり。

名(新)とり川心にくだす埋木のことはりしらぬ袖のしがらミ

定家名とり河春の日数ハあらはれて花にぞしづむせゞの埋木

本歌ヲばにおどしつけてよめる歌也。此等にて

前の歌を能見侍べき也。

素性法師

古今　百

今こんといひしばかりに長月の有明の月を待出つる哉

有明の月をまちいでつるかなといふを顕昭ハ一夜

の事といへり。定家ハ月のいく夜をかさねしと

初秋の時分よりはや秋もくれ月も有明にと成

たると也。他流当流如此也。

元良親王　陽成院御子

三品兵部卿

天慶六年薨去

後撰

あふことハ遠山ずり(とり)のかり(す)衣きてはかひなき音をのミぞなく

序歌也。山どりハあふ事まれなる鳥といへり。山すり

衣にとりなせり。きてハといはん為也。音をなき
てあふ事まれに侍にや
他本きぬに遠山すりたる事也。野行幸など
には桐竹山鳥遠山を青々と摺テきる事も
あり。いづれにても同事也。

人丸

拾遺　百

足引の山鳥の尾のしだりおのなが〳〵しよを独かもねん

此歌義なし。一向に手もつけられぬ歌也。只足曳
のと打出るより山鳥のおのしだりおのなが〳〵し
といへるさまいか程もかぎりなき夜のながきさ
ま也。詞のつゞき妙ニシテ風情尤長高シ。能々眼
ヲ付テ数篇吟ジテ其味ヲ心ミ侍べし。無上
至極の歌にや侍らん。人丸の歌ハ心ヲ本とし
たりとぞこと葉景気をのづからそなハれる
ハ天然歌仙の徳也。古今ノ間に独歩すと
いへる此ことハりにや。山鳥のお〇のはつおと云も

長といふ心也。長谷ト云ニおなじ。はつお花といふも
長尾花也。

元良親王

後撰　百

侘ぬれバいまはたおなじ難波なるミをつくしてもあハんとぞ思ふ

是ハ宇田御門の御時京極ノ御息所へ忍びて
かよひけるをあらはれて後又御返したる歌
也。侘ぬればとハ今ハ又あハずとも立にし名ハ
おなじ名にこそあれミをつくしてもあハんと
云り。ミをつくしハ難波の縁也。同じなにハと
つゞけたるハおなじ名とうけたる詞也。幽玄体
の歌也。侘ぬれバあはれなる五文字也。拾遺ニ

侘ぬれバ常にゆゝしき七夕もうらやまれぬる物にぞ有ける

前大僧正慈円忠通　兼実　月輪関白

慈円　号慈鎮和尚

女子　皇嘉門院

新古

我恋は庭の村萩うらがれて人をも身をも秋の夕暮

此歌他流ニハ説々在之。たゞ是万葉に

我せこを我待をれば我宿の草さへ思ひうら枯にけり

此歌をとれり。我恋ハといふ五文字まつを時雨ノ
など同前也。かくいひ出てハ末かけあはぬ物なれ
ば斟酌すべき物也。心ハつれなき人ヲ待テ其人
を思ふに時分やう〳〵秋になりて庭の萩も
さく時分ハさりともとうちたのむに花もはや
うつろひはてゝうらがれになれバ今ハはやとふ
事もあらじ人の心ほどうらめしき物ハなしと
人をもうらミ身をも休したる心也。庭といふ字
に心を付べし。野べのはぎなどにてハ曲も有まじ
あさ夕ながめなれたる庭前の萩にてかくいへり。
萩ハ恋に縁ある物也。万葉よりこのかた詠ずると也。

新古

後鳥羽院

四十二ウ

袖の露もあらぬ色にぞ消かへるうつれバかハる嘆せしまに

被忘恋の心をとあり。花ノ色ハうつりにけりな
の小町の歌を本歌にし給へり。心ハ境に転ぜら
るゝ物にや思ひそめしばかりの時ハ常の涙ニテ
人のうつりかハるにしたがひて昔ノ露ハ物にも
あらず我思ひもあらぬ恨と也涙の色までも紅
になる義也。きえかへるは露の消ると思へばむすび
むすぶかと思うへば消などして時うつりて紅
涙に成(マヽ)たると読せ給へり。

よミ人しらず

古今

おもひ出るときはの山の岩つゝじいはねバこそあれ恋しき物を

例の序歌也。思ひ出る時とうけたる詞也。一度休して
程へたる中なれバいひ出ぬばかりにてこそあれ
思ひ出る時ハ恋しき物をとせんかたなくなげく
心也。物をといふ所余情ある歌也。岩つゝじハい
はねばといハん為也。

元輔　深養父孫　顕忠子

後拾遺　百

契きなかた見に袖をしぼりつゝ末の松山波こさじとハ

詞書に心かハりて侍るける女に人にかハりてと有

かたミハ互也。

君をゝきてあだし心を我もたバ末の松山波もこえなん

是より出たり。心ハさてもかくあだにかハる物を互

に袖をしぼりて波こさじと契けるよなど少はぢ

しむるやうにいへる心也。かハるをば中々うらみ

ずしてかくかハる人としり侍らバちぎらじ

物をと悔なげく心也。悉皆かハりたる歌也。

源氏

波こゆる比ともしらず末の松まつらんとのミ思ひける哉

うき舟の心かハりたる時かほるの読テをくられたる歌也。

西行法師

千載

なげけとて月やハ物を思ハするかこちがほなる我涙哉

月の前の恋ノ心也。終夜月にむかひてうちなが

四十三ウ

むるに物かなしくて月のわが心をいたまし
むるやとうらめしきを思ひかへしてかくいへり。
少平懐の体也。是細行（マヽ）の風骨也。つくろふ
所なきハ上手の量なるべし。
世にふれば物思ふとしもなけれども月に幾度袖（ぬらすらん）（マヽ）
やどり木の巻に独り月な見給ひそよ心空
なればいとくるしと聞をき給ひて匂ふ宮
の中の君への給ひしこと葉也。

白楽天贈内侍

暮（ニ）下対（シテ）二月明（ニ）一思（フコト）中往事（ヲ）上損（シ）二君（ガ）顔色一滅（セン）二君（ガ）年（ヲ）

楽天ガ女房へ送タル詩也。いづれも此詩より
出たる心なるべし。

四十四オ

天正十四暦八月下旬

丹山隠士玄旨

四十四ウ

久我知亜相此抄を講べきのよし仰られしを

はゞかりなきにしもあらねばいなミ申せし
かどしゐてたび〳〵に成しかバ尊命そむき
がたくて三光院内府先年御講釈の
聞書はこのそこにとりをきしをえらび
いでゝかたのやうにかきあつめ二冊になし
侍ぬ。郭氏荘氏を注す管中に豹を
窺と哉らんいふためしも有ながらをろか
なる耳に残れるかたはしを成とも申あら
ハし侍らんの心ざしばかりに南まことに
其一班を見る物ならし。
右一冊徳大寺前内相公以愚本
可被証写云々固陋之私抄雖
非無其恐先哲之御説何
敢有其憚乎仍応尊命終
令逐賢写給耳

天正十五年十二月四日

二位法印玄旨

四十五ウ

（はやし・たつや／本学名誉教授）